

<演題名>Reverse Cleavage は Day3 での胚選択評価における指標とはならない

<発表者名>村重 紘志¹ 稲場 美乃¹ 中西 麻実¹ 水野 里志¹ 井田 守¹

福田 愛作¹ 森本 義晴²

¹ IVF 大阪クリニック、² HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

移植胚の選択には従来形態学的評価や発育速度が用いられていた。近年、タイムラプス (ES) の導入により培養環境を維持して胚の連続観察が可能となり、新たな胚評価法が導入されつつある。一度分割した割球が再び融合する Reverse Cleavage (RC) という現象もその1つであり、RCが見られた胚 (RC+) は見られない胚 (RC-) と比較し、胚発育が不良とされている。しかし、従来評価により、RC+が除かれているならば、必ずしも RC を観察する必要はないと思われる。このため、Day3 良好胚選択において、RC の有無が有効な指標になり得るか検証した。

【対象と方法】

2013 年 6 月から 2016 年 12 月までに ICSI 症例で ES による Day3 までの観察培養を行った 84 症例 91 周期の移植可能胚 241 個を対象とし以下の検討を実施した。従来の形態学的及び発育速度による胚評価法 (従来法) と RC を加味した評価法 (RC 法) の 2 法により胚評価を行い、それぞれの評価法で周期ごとの最良好胚を決定した。この 2 つの評価法で最良好胚が異なる周期の割合を算出し、さらに RC 胚を移植した 8 周期の予後についても検討した。なお RC 法では従来法の優先順位の中で RC 胚を最下位に位置づけた。このため、全胚で RC が認められた周期の順位は従来法どおりとした。

【結果】

従来法と RC 法で最良好胚が異なった周期の割合は 11.0%(10/91)であった。RC+胚と-胚の胚移植当たりの妊娠率及び生産率は、それぞれ 37.5%(3/8) vs 26.1%(6/23)、25.0%(2/8) vs 21.7%(5/23)で、有意差は認められなかった。

【考察】

RC を胚評価の指標とすることで、従来法で選択された最良好胚が変更になる症例の割合は約 11%であった。今回は分割期胚が複数個得られた症例のみを対象としているが、分割胚が1個しか得られず選択の余地のない症例では、RC 評価の必要性はさらに低下する。さらに、RC+胚を移植した場合でも健児が得られていることから、RC 評価法単独では、Day3 良好胚選別の有用な指標となりえないと考えられた。